

《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》 作品解説 水谷 彰良

初出は 2015 年 ROF 予習会の配布テキスト。増補改訂版を日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。

(2015 年 8 月再改訂)

題名 オルフェオの死によせるアルモニアの涙 *Il pianto d'Armonia sulla morte di Orfeo*

ジャンルと形式 カンタータ (cantata)

作曲 1808 年 (8 月以前)、ボローニャ

作詞 ジローラモ・ルッジャ (Girolamo Ruggia, 1748-1823)、イタリア語

初演 1808 年 8 月 11 日ボローニャ、リチェーオ・フィラルモーニコ (Liceo filarmonico 現在の名称は G.B.マルティーニ音楽院)

編成 テノール [アルモニア Armonia (註)]、男声合唱 (テノール I・II、バス)、管弦楽 (1 フルート、2 オーボエ、2 クラリネット、1 ファゴット、2 ホルン、2 トランペット、弦楽 5 部)

註：古代ギリシアにおける調和の女神ハルモニア [Apponia] (ラテン語では Harmonia) のイタリア語の呼称。ロッシーニが女性歌手ではなくテノールをこれに当てたのはリチェーオ・フィラルモーニコでの演奏が前提のため、ニソフの合唱が男声合唱であるのも同様の理由からであろう (筆者による推測)。

初演者 レオポルド・アゴスティーニ (Leopoldo Agostini, ?? テノール)

註：合唱はリチェーオ・フィラルモーニコの学生が務めた。

演奏時間 約 18 分

自筆楽譜 ボローニャ、G.B.マルティーニ音楽院 (Conservatorio di Musica "Giovanni Battista Martini") UU 4

初版楽譜 Casa Ricordi – BMG Ricordi SpA, Milano. (Paolo Rossini 校訂。演奏用の貸譜)

現行譜 同前

全集版 未出版 註：ロッシーニ財団の批判校訂版第一次校訂譜はバオロ・ロッシーニの校訂で 1991 年頃に成立し、リコルディ社の貸譜とされている。

構成 次の四つの部分からなる。

- 1) 序曲 [シンフォニア] (ハ短調、4 分の 4 拍子、アンダンテ〜アレグロ)
- 2) 合唱〈どれほどロドペイ [註] の平原を *Quale i campi Rodopei*〉(合唱)
註：ギリシアの東マケドニアのトラキアに位置するロドピを指すと思われる。
- 3) レチタティーヴォ〈髪をかきむしり *Sparsa il lacero crine*〉とアリア〈無慈悲な復讐の女神にさえ *Nelle spietate Furie*〉(アルモニア)
- 4) レチタティーヴォ〈だが、すでに甘美な音を *Ma tu che desti già sì dolce*〉と合唱付きアリア〈ロドペの木々と花々があるかぎり *Finchè fronde e fior del Rodope*〉(アルモニア、合唱)

解説

1808 年、16 歳のロッシーニはボローニャのリチェーオ・フィラルモーニコのコントラバスのクラスに在籍し、友人たちとミサ曲 (通称《ボローニャのミサ (*Messa di Bologna*)》) を共作して 6 月 2 日にボローニャのサン・ルーカ教会祈祷所で初演するなど作曲活動にもいそいでいた。《オルフェオの死によせるアルモニアの涙 (*Il pianto d'Armonia sulla morte di Orfeo*)》は学年修了課題に作曲したカンタータで、このジャンルにおけるロッシーニ最初の作品となる。

テキストは、スイスのモルコーテに生まれ、ボローニャで活動した詩人ジローラモ・ルッジャ (Girolamo Ruggia, 1748-1823) の作詞。エウリディーチェを冥府から取り戻すことに失敗した竖琴の名手オルフェオが、悲しみのあまり女を拒んでバックスの巫女たちに身体を引き裂かれたギリシア神話を基に、オルフェオの運命を嘆く前半部 (合唱、アルモニアの最初のレチタティーヴォとアリア) と天界で神々の歌手となったオルフェオの栄光を称える後半部 (アルモニアのレチタティー



《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》の自筆楽譜(冒頭合唱の最初のヴァージョン)

ヴォと合唱付きアリア) からなる。

師スタニズラオ・マッテイ (Stanislao Mattei, 1750-1825) 神父の添削を含む自筆楽譜がボローニャの音楽院に現存し、序奏とアレグロの主部からなる序曲 [シンフォニア] から、16歳のロッシーニが18世紀の疾風怒濤様式、モーツァルトやマイルなどのドイツ音楽を十分に摂取していたことがうかがえる。続く合唱は、最初に書かれたハ短調、4分の4拍子からハ長調、4分の3拍子に改作されている。二つのレチタティーヴォは共に合奏付きで書かれ、二つ目のそれは抒情的なチェロ独奏を伴う。アリアは一つ目が単一テンポのカヴァティーナで、合唱を伴う終曲のアリアは前奏に技巧的なホルン独奏を聞かせる。これは優れたホルン奏者の父を持つロッシーニがこの楽器に習熟していたことの証で、間奏でもホルンのパッセージが際立つ。この作品は古典的な性質を備え、アリアにおける技巧的な歌の用法は終結部にのみ聴き取れる。

初演は同年8月11日に同校で行われた。テノール独唱のレオポルド・アゴスティニ (Leopoldo Agostini?) は在校生もしくは卒業生と思われ、オペラ歌手としての活動は1813年頃から確認しうる。ロッシーニはこの作品により対位法技能賞のメダルを受けた。本作は初演のみで忘れ去られたが、1990年1-2月に初録音され (カルロ・リッツィ指揮、テノール: エルネスト・パラシオ。CDはAGORAから発売)¹、ロッシーニ財団の批判校訂版第一次校訂譜 (パオロ・ロッシーニ校訂) を用いた演奏は翌1991年8月21日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われた (ロッシーニ劇場。ガブリエレ・フェッロ指揮、テノール: ロックウェル・ブレイク)。

推薦ディスク

- ・ロッシーニ・カンタータ全集第2巻 アルモニア: ポール・オースティン・ケリー (テノール)、リッカルド・シャイー指揮スカラ・フィルハーモニー管弦楽団 1997年録音 Decca 466 328-2 (海外盤) UCCD-1034 (国内盤。廃盤)



¹ 冒頭合唱は最初のヴァージョン (短調の4分の4拍子) と改作版 (長調の4分の3拍子) を共に演奏。